
これはゾンビですか？ 俺はゾンビじゃないけどね！

水車

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはゾンビですか？ 俺はゾンビじゃないけどね！

【Nコード】

N8386Q

【作者名】

水車

【あらすじ】

ゾンビの世界に転生みたいな感じで行く阿佐^{あさすい}替人。

本人は『これはゾンビですか？』の世界を遠くから眺めて楽しむはずだったがなぜか巻き込まれていく。

神様にいろいろ特殊能力をつけてもらって最強！ ってほどじゃないけどそれなりに強いです。

1話

「なんだっけ？ 名前がでてこねえー！」

「お前、友達の名前を忘れるなんて最悪だな」

俺が目を覚ますとどこかの教室で授業を受けている最中だった。
俺はすぐに立ち上がり全力で叫んだ。「ここはどこだ！」ってな。

そうすると後ろの席の名前が……出てきた。
あいかわあゆむ 相川歩だ。
立って頭を抱えながら俺は今の状況を少しずつ思い出す。

あれはいつだったっけか。

確か、一月一日だったな。

一人むなしく初詣に行ってたような気がする。
別に一緒に行く友達が居ないわけじゃない。

朝、0時。朝と云っていいのか深夜というべきなのか知らないが
そのときの俺の気分は朝だった。

なにを俺は血迷ったのか、年越しをしてすぐに初詣に行こうと思
い立ったのがすべての始まりだ。

すぐに外の寒さに耐えられるように服を着込み、財布を持って外
に出た。

寒かった。ものすごく寒かった。

目にある水分が凍りつきそうなほどに寒かった。

とにかくその寒さのなか、つねに地震が襲っているかのように体を震わせながら近くの神社を目指す。

そして、苦労の末着いた神社は普通じゃなかった。

かなりおんぼろで今にも崩れそうなその神社は俺の向かっていた神社とはまったく違っていた。

こんなところがあるとはとツチノコを見つけた気分でテンションが上がっていたのだが、だんだん怖くなってきた。

人が、いなかった。どんな神社でもさすがに一人ぐらいはいるだろと言っるのは俺の考えだ。

そして、神社から出られない。

なぜか知らないが、神社の外に出ようとすると変なバリアで弾き返される。

なんだよ、これは。

とりあえず全力でぶん殴ってみると、バキッ！　といい骨の折れるようないい音が……

よくねえよ！

慌てて右手拳を確認したけれど運がいいのか知らないがまったく怪我していなかった。

いやあ、あのときは俺すげえ！　とかはしゃいでいたけど、すぐにそのバリアに変な文字が浮かび上がる。

『募金して、お願い』

なんかすげえ切なげな感じだ。声はしないけど文字がなんか募金って……神社なんだから賽銭箱に金いれろってことだよな。

賽銭箱に金を入れるってつまり初詣していけばいいんだろ？
だったら、いいや。ちょうどいい。

神社でお祈りといったら五円玉だ。なので俺は五円玉をだそうとしたら、なんの因果か知らないが財布が手から抜け落ち、すごい感じに賽銭箱に入ってしまった。

「うおっ！ え、うわあああああ！」

俺は泣いたよ。賽銭箱の前で全力で。
外から見たら果てしなく滑稽な姿だろうな。

それほどまでにそのお金は俺にとって大事な物だったんだ。
高校生なんだから金があると思うか？

否！ 俺はあんま金ないんだよ！

「はははははは。賽銭箱壊して取ってやる」

手ごろな大きさの石を探していると、突然激しい眩暈に襲われた。
なんだ、これ。

そのまま、俺の体は崩れ落ちて動かなくなった。
意識は一応、ある。

足音が耳に届き、俺の近くで止まると背中を障られた気がした。

背中に何か張られた？　そこで保っていた意識が吹き飛んだ。

「ここは……俺のへや？」

目が覚めると、俺は自分の部屋に居た。

さっきのは夢だったんだと喜んでいたんだけど、ふと自分の服装がおかしい事に気づいた。

布団で寝てはいるけど服装は初詣に行くために着た服だった。慌ててポケットに手をつ突っ込んだけど中には何も無い。

あはははは、笑うしかないね。

しばらく乾いた笑いで笑い続けていると、最後なにか背中にされたのを思い出した。

上に羽織っていたジャンパーを脱ぐと書きなぐったような文字で『早く寝ろ。あと願い考えとけ』って書かれている貼り紙が貼られていた。

首をひねるしかない。でも眠いからいいか。

夢の中。

夢と理解できたあれはなんか変な感じだった。

目の前では王様とかが座りそうなイスに腰をおろしてこちらを見

ている女の子がいた。

「来たか。それで願いは何だ？」

それで、もなにもそのまえはしらねえぞ。

「願いつて……その前にこの状況を説明してくれ」

「まったく、何も知らないのに金を入れたのか。いいか、その飾りの耳の鼓膜かつぽじつてよく聞け。あそこは願いの叶う神社。金の量で願いの大きさが決まる」

随分と現金な神様だなあ。

「おまえはその神社に来て、大量のお金を貢いでくれた。今まで来た奴の中でおまえほど金を入れたヤツは初めてだ。今までは五円玉しかいれないヤツばっかだったからな。そういう奴らは全員、病院で寝込んでいるだろうな。とにかく、お礼をしに来たって事だ。何がいい？ なんでもいいぞ」

だらだらだら。冷や汗がとまらねえ。あつぶなかったあああああ
ああー！

もう少しで俺も病院で寝込むことになってたなんて。

「早くしろ」

俺が危険を知らずうちに回避しているのを喜んでいると急かされてしまった。

でも、どうつすかな？

願いなんてなにも……ああ、魔法とか使ってみたいと思ったことがあるな。

でも、もっと楽しそうなのは漫画やゲームの世界に行けたらいいよな。

目の前で好きな話のストーリーを見れるなんて考えただけで面白そうだ。

それ採用だよ阿佐^{あさ}くん。

「俺は『これはゾンビですか？』の世界に行ってみてーなあ。そういうのもできんの？」

「私に不可能はたぶんない。それは何なのか教えてくれれば送ってやる。だが、一度行ったらこの世界には二度ともどれないぞ。いいのか？」

「俺はな思いついたらすぐに実行するように心がけてんだ。なんつーんだっけ……そうだ、思い立ったら……白曰？」

「……おまえが馬鹿なことは分かった。おまえの部屋にあった漫画とライトノベルがあるがこれで間違っていないか？」

女の子の手元には今までに発売された『これはゾンビですか？』が集合していた。

うん、いつ見ても可愛いよな。

俺が領いたのを確認すると女の子はそれらを食べた。

「おまえ……ヤギだったの？」

目の前で俺のもっていた『これはゾンビですか？』の本をむしゃむしゃし始める。

「違う。話を覚えているんだ。なるほどな。魔法がこの世界にはあるのか。なら最低限おまえも戦えるようにしておいたほうがいいな」

「へ？ いや俺は遠くからストーリーを眺められればいいよ」

「本当にいいのか？」

そう言われると困る。

確かにさっき魔法を使いたいつて思ってたしなあ。

戦わなくても魔法は使ってみてえよな。

「よし、やってやるよ！ なんでも来いつてんだ！」

「そうか、そうか。言っておく事がいくつかある。おまえの存在はその世界に入った瞬間に何の違和感も無く認められる。おまえの性格を元にその世界で生きていたとしたらどのぐらい友達ができるのかとかすべてが世界によって決められる。まあ、主人公である相川歩？ とは友達になれるようにこちらで設定しておくけどな。とにかく頑張れ」

長く何か異国の言葉を使っていた。

「……難しいのはキライなんだよなあ」

「……大事な事を言っておく。おまえはその世界で『これはゾンビですか？』のストーリーを完全に忘れる」

「ふうん。そんで？」

「もつと突っかかってくると思ったんだが反応薄いな。理解できてるか？」

「俺は馬鹿じゃねえから分かるよ。だってよう、話を覚えてないなら新鮮に楽しめるじゃん！ 最高うーっ！」

「いろんな意味で前向きなんだな。武器についてだが――」

「剣！ 剣！ 剣！」

迷わずにそう答える。だって、剣だぜ？ 斬れるんだぜ？
だれでも一度は憧れると思うんだ。

だって剣だぜ？ 鋭いんだぜ？

「分かった、銃にしよう」

「ええええええええー！ 聞いてた？ 俺剣がいいんだって！」

「よく考えてみる。なんでわざわざ接近戦でしか活躍しない剣がいんだ？」

「だって、かつこいいじゃん」

「いやそんなキラキラ笑顔で言われても……おまえもし銃相手に剣で挑むとしたらどうする？ 距離的に近づいてる間に死ぬぞ？」

確かにそれは剣で叩くのは辛いよなあ。

そう言われると銃のほうがいい気がするけど。

「うーん。でもゲームとかって剣を使う事がよくあるじゃん。それに歩だつて接近戦だぞ?」

「チェインソーを使うみたいだな。ならスーパーボールと銃。どっちがいい?」

なぜにスーパーボール? 確かに足つば押すときは使えるが。

「ソードだ。つつか何でそんな銃に拘るんだ?」

「いや、銃のほうが好きだからだ」

「自分の嗜好を押し付けなくてくれよ。まあ、いいや。そもそも俺が戦う事なんてないだろうし」

いまさらになって気づいた。これじゃあまるで俺が前線に立つみてえじゃねえか。

女の子はうんうんと頷いてから、

「そうだ、そうだ。ほら、マシンガンだ。あと、魔力もそりゃたくさん、身体能力も強化しておいたからな。他にも面白い能力をあげていたから試してみるといい。あと、おまえの希望通り剣だ」

ぽいっとマシンガンと剣を投げてきた。

鞘に収まった長いを受け取って、テンション上がるなあ。

鞘から抜くとあれ？　なんか異常に短いぞ。
ゲームとかで言ったらダガーだ。短剣だ。

もしかしたら30cm定規のほうが長いかもしれない。

マシンガンは両手で持つてちょうどいい大きさだ。片手でも持てない事もない。

「どうだ。一瞬すげえと思っただろ」

「ありがとな。やったあああ。剣だ剣だ」

「怒ってツツコミをくれるものだと思ってたんだが喜んだならいい。短剣は魔力を込めれば使える。マシンガンは弾が無くなったら勝手に魔力を奪ってリロードする。短剣は魔力を込めない限り斬れる事はない」

「長い説明は理解できないけどまあ、使えば分かるだろ」

「おまえと話していたら頭が痛くなってきた。マシンガンはさすがに目立つからな。このハンドガンやる。これ自体でも使う事ができるから覚えておくといい。近づけて『消えて』でも『収納』でも『整理』でもなんでも片付ける系の言葉を心で言えば消えるぞ」

ハンドガンを渡されたのでマシンガンに近づけて『どっかにいけ』と考えると消えた。

これでおっけーかな？

「短剣はむき出しでも斬れる事は無いからポケットにでもしまっておけばいいだろ。最後に本当にいいんだな？」

「あーちよつと待ってくれ。この世界での俺はどうなるんだ？」

「いなかったことになる」

「ならいいや」

未練はない。家族もいないしな。

「では送る。向こうに着けば『これはゾンビですか？』の世界での過ごした日々の記憶が頭に入ってくるだろう。多少頭が痛むかもしれないがそこは頑張れ。あと身体能力も上げておくし。魔装少女になれるようにもしておいたし」

細かい事はもういいよ。早く！ 早く！ へりーあっぷ！
あれ？ 今変なことを聞いたような気が。まっ、いっか。

「健闘を祈る」

「任せろ！ 何を？」

「名前は今の阿佐^{あさすい}替人でいいか？」

「いいから、早く！ 早く！」

気分は遠足前の小学生。

本当に次目を開けると『これはゾンビですか？』の世界にいるのかな？

俺はそんな事を考えながら意識を失った。

2話（前書き）

更新が遅いのはすいません。

話ながいかもしれませんが短くしたほうがいいのか？

2話

現在の俺は高校一年生。俺と、歩と織戸は無事高校に入学して今はのほほんと過ごしている五月二十六日。

この世界に来たのは中学二年のときだがその前の記憶も俺には合った。

本当にその記憶では俺は歩や織戸とは幼馴染みたいなものだ。

表向きは平和にすごしてる。

俺には魔力があるらしくそれをメガロとか名乗る奴らに探知されて年中命を狙われている。

無駄に魔力があるせいで……。

そのたびに神様がくれた些細な力を使って撃退、逃亡を繰り返している。

この世界には吸血忍者なるものがいてとりあえず逃げ回ってればそいつらがメガロを倒してくれるんだ。

時々コスプレした女の子が倒してるときも会ったなあ。

うう、受験勉強に必死こいてる時もあいつらは襲ってきてそれはもう大変だった。

よく、受かったよ。偉い、俺。

「なに感慨に耽ってるんだ？」

歩がわずかに口元を吊り上げて笑っている。

「いやね、人生つてものは大変だよなあと思つてさ」

「いみわかんねえ」

織戸に引かれてしまった。そんなことをいちいち気にしてたら意味ないのでとりあえず笑つてみた。

ほんと日常はいい。

非日常もつまらないわけではないけどね。

「んじゃ、歩俺は先に帰らせてもらうから。じゃな！」

「いや、同じ家に住んでんだし一緒に帰ればいいだろうが」

歩はカバンを持って、俺に追いついてくる。

なぜ俺がいきなりこんな行動に出たのか教えてあげたい。

メガロつてやつは魔力を探知できるらしく俺はそれを逆探知できる程度に実力もついている。

つまり、今探知されたのだ。

魔力が消せればいいのに、こんちくしょー！

「俺はちよつと帰りによつてくところがあるんだ。じゃっ！」

「はあ、分かったよ。んじゃな」

歩をまき急いで靴に履き替え学校から離れ、人の少なそうな場所を探す。

ズシンッ！

目の前に変な動物をモデルにしたようなメガロが現れた。
なんだろこいつ。

「男？」

男だよ。なんか文句あるか？
メガロはそれだけ呟くと一気に俺の懷に踏み込んでくる。

よかったよ。もしも俺が普通の人間のまま魔力を持ってこの世界
に来てたらあっさり死んでいた。

俺の胸に拳が突き刺さる寸前に俺は横へと転がる。
空を切った拳に動揺などせずすぐにまた俺に照準を合わせ迫っ
てくる。

戦い慣れしている、よなあ。制服のすそで隠れていたハンドガン
を取り出して、二回発砲。

目を潰してやった。
両目を押さえて怯んでいる隙に俺はメガロが塞いでいる道とは逆
のほうに走って逃げる。

魔力の探知だけじゃ攻撃はできないみたいだ。
再生するのか知らないが今は逃げよ。

そのまま、俺は大体二時間ほど街のあちこちを走ってメガロから
逃走しました。

たぶん、誰かが倒してくれたんだろ。

家に戻ると歩が料理を準備してくれていたので俺はそれを頂いた。さてさて、俺が住む場所はどこののか？ そんな疑問を持つてる人はきつとたくさんいるはず。

それは……ここ、歩の家だぁあ！
驚いた？

うん、ごめんなさい。

「なんで頭下げてるんだ？」

「俺は常に人に敬礼しているんだ。さて、俺は風呂でも入って寝るかな」

宣言どおり風呂に入っすで俺は部屋でベットに横になってい
る。

この世界に来て二年か。

大変な事もあったけどまあ、楽しいよな。
歩や織戸と一緒に馬鹿やってるのがね。

また逆探知。……なんで一日に二回も。
メガロにこの家を破壊されては敵わないので窓を開けて外に飛び
出した。

日がすっかりと落ちた五月の外は俺には特に寒く感じない。
とにかくメガロにはまだ見つかっていないらしいので俺はなるべ

く人がいなそうな場所を狙って行動している。

と、似たような事をしている人に遭遇した。

暗い夜の中でもそれ自体が輝いているようなほどに美しい銀色の髪。

背丈があまり大きくなくその大きくない体は鎧と箆手に覆われている。

あまりにも現実離れた格好だ。

だけどその現実離れたはずの姿が似合っている。

つい、俺はメガロに狙われている事も忘れその女の子に話しかけてしまった。

「ないすとみーとー」

我ながら完璧と自負できるほどのジャパニーズイングリッシュだった。

女の子は俺の顔をちらと見ると。

一枚の紙を手渡してくる。

『Nice to meet you』

綺麗な文字でお返事が返ってきたことに俺は天に昇る気持ちだ。この世界に来てよかった。心から思ったね。

なんとかこのまま、会話を続けようとあれやこれやと話題を探している。

「ぶおう？」

ずしんと大きな地響きを立てて俺と少女の前に一つの巨体が下りてくる。

メガロ。見た目はゾウに近いのだが、ところどころ変なのでたぶんゾウじゃないな。

まずいぞ。ここには一般人もいるんだ。俺とは違って非日常では生きていない、一般人が。

俺が女の子をどうしようか迷っているとゾウは関係ないとばかりに太く、でかい、拳を俺に向かって振るう。

スピードは目で終えないレベルじゃないがそれでも速い。こんなものを食らえば俺はともかく華奢な女の子の体は木の枝を折るように折れてしまう。

だから、俺は女の子を突き飛ばして、ゾウの拳を体を受ける。腕は俺を貫通している。

驚き顔のゾウ。たぶん、攻撃があたりなかったことに驚いてしまっているのだろう。

その驚きは命取りだ。今、ここは命のやり取りを行う戦場だ。どんな事が起こっても驚かないようにしていなければあっさりと死んでしまう。

つまり、お前はもう負けだ、変なゾウさん。

俺は腕を無視してゾウの背にゾウの体を擦り抜けて向かい、浮く。

大体3mほどあるゾウの首元まで飛んで、さっきまで使っていた

能力を解除する。

とたんに足場がなくなつたかのように俺の体は地面に落ちてしま
うので、ゾウの首を掴んで思いつきり捻る。

首を捻られたゾウは首から血を噴出させて、その場に崩れ落ちる。
倒れたのと同時に俺の手にある首と大きな体は白い粒子となつて
どこかへと消えていく。

俺には幽霊化つて言う力がある。体を失くすことができるんだ。
体がなければとうぜん攻撃はすべてすり抜けるだけだ。

さらに幽霊なので空に浮く事がで切るんだ。ポルターガイスト紛
いの力もあり、物を浮かしたりもできて、便利だ。

ただ、便利で強いんだが、いろいろ欠点もある。
こちらから相手に触れられない。十〇分使った五分後に反動とし
て体が犬になる。

犬になるのは俺の記憶の中に神様からのメッセージがあつた。
『面白そうだから』だそうだ。

ふざけんなよ、あのやろう！

とにかく、今回のバトルはラクだったな。相手がそれほど強くな
かつたし。

俺はゾウが倒れたことによりぶつ壊れたコンクリの道路を直しな
がら、少女のほうを見やる。

こんなことがあつたんだ。さぞ驚いてビクビク怯えているだろう。
怯えてたら俺が優しく抱きしめてやろうなんて思ってみたんだが。

無表情顔で我関せずとばかりにしている少女。
あるえ？ もしも俺が女の子と立場が逆だったら恐怖のあまり声がでないか、逃げ出すか、気絶するか——ああ、驚きすぎちゃって気絶してるのか。

俺は少女に近づいていき顔の前で手を数度振る。
少女はさらさらとペンを動かして、反応する。

『なに？』

「いや、てつきり気絶してるのかと思って……」

目の前であんなことが起こったら普通なら驚いて腰を抜かすだろう。
う。

女の子は次の紙を俺へと向けてくる。

『あなたは……魔装少女？』

魔装少女って俺の記憶にあるのだとメガロを倒してくれるコスプレ女の事だ。

「俺が女に見えるか？」

からかってそう声をかけながら、近寄っていく。
記憶を消すために。俺はあんまり記憶操作がうまくないので、できれば相手に直接触れて操作したい。

「悪いな。さっきのを見られたからには記憶を消させてもらっぞ」

俺だつてこんなかわい子に忘れられるのは心苦しいけど、やるしかないんだよ。

目から涙出てきそうだよ。

『大丈夫。私は――』

――普通じゃないから。そう書かれた紙を見て、俺は記憶を消すために伸ばしていた手を止める。

言われてみて、確かに。服装がおかしいもんな。鎧と籠手をつけた少女なんて俺は今まで一度も見たことない。

逆に毎日見ていたら俺はその世界が狂っていると言ってるさ。

「何が普通じゃないんだよ。えーと……」

名前を呼ぼうとしたが俺はこの子の名前を知らないんだつた。口をもごもごさせるしかなかった俺は、ガントレットの動く音がしたので目を向ける。

『ユークリウッド・ヘルサイズ』

俺の考えを悟って名前を覚えてくれるなんて……この子すごい子だ！

ユークリウッド・ヘルサイズって名前なげえよな。

省略して、クリ？ いや、木？ うーん。

しばらく顎に手をやって悩んでいた俺の頭にいい名前が飛来した。

「ユーでいいよな？」

『かまわない』

さらっと文字を一瞬で書くなんてすごい。

「俺は阿佐替人だ。替人でいいから。んじゃ、じゃーなーって、うわっ！」

ぼんっ！ そんな音と共に俺の体は煙に包まれる。

ほら、アニメとかでよく煙が出て、それが晴れると変身した、みたいなものってあるだろ？

まさしく今の俺はそれと同じだ。

体はどんどん小さくなっていき、俺は自分の手を見て犬になっちまったと理解する。

俺の犬の姿はデフォルメされたアニメのような柴犬の子犬だ。前に鏡で見たことがあったけど、子犬だからあまり大きくないと、急な浮遊感。

この姿なら女子のスカートの中も覗き放題だ。覗かないけど。

俺は煙の収まったこの場所から離れようと四本足で——二本足でもあるけるけど見られるといういろいろ問題があるので——歩いていると、急な浮遊感。

俺の見える視線の高さがどんどん上がっていった。

エレベーターにでも乗ったの？

俺はなにやらいい匂いのする腕に抱っこされていた。青というか紫に近い服が目に入る。

恐る恐る顔を上げると、女の子——ユーの姿があった。

「なにやってるんですか？ できればいますぐに身を隠したいので
すけど……」

敬語で尋ねると俺を片手で掴み余ったほうの手で器用に紙にペンを走らせる。

『気になったから。……あなたは人間？』

「正真正銘、紛れもなく人間だよ！」

『犬とのハーフ？』

「人と人から生まれてるよ！」

ユーは俺が犬と人間の間から生まれたとも思ってるのか？
あまりの突拍子のない考えに俺は苦笑いをするしかない。

女の子はそれきり質問をせず、俺の質問も受け付けず俺を抱いた
ままどこかへと歩き去っていく。

警察さん！ 誘拐ですよー！

3話

『お座り』

わん。

『お手』

……わん。

『四回転ジャンプ』

できるかあああああーっ！
すっかり日が暮れた時間は……。

学校から帰る時に持ってきたカバンから携帯を掴んで時間を見ると8時かよ！？

この犬の手まじで使いづらい。

頑張つて歩にメールを送る。内容は今日は夕飯いらないうと。せっかく作ってくれてるだろうに悪い事したな。

思ったよりこの犬の姿が長い。
まあ、そろそろ戻るだろ。

……あれからいつたい何時間が経っただろう。

『帰らないの?』

ぺらっと何百枚目か分からない紙を見せてようやくその質問をしてくれた。

現在時刻は日にちを跨いで午前1時。

あれからまったく姿が戻らず俺はさめざめと泣いていた。
俺に片手を出してお手をさせる気満々のユ一。

帰らないのか聞いてたよな? これ、なに?
俺は片手を出しながら、

「姿が戻ったら帰るつもりだったんだけど……まあ、歩もそろそろ寝ただろうし戻るか。ユ一はかえんねえの?」

疑問を口にした。

ユ一は何も答えてくれない。

もしかして、まずいこと聞いた?
俺は両手を開いて適当にこの空気を壊す言葉を考える。

「そ、そうだ。俺なんでも屋なんだ。だから、なんでもしてやる。
ほら、なんか命令してみろよ」

なんでも屋って。

ユ一は俺の言葉に興味を持ったのか犬の顔に近づけてくる。

『回転したまま上昇』

「できません! 嘘言ってごめんなさい!」

空回りしたまま終わるのはごめんだ。

俺はかばんから財布を取り出して、かかげる。

「なんか食う？」

今俺たちがいる場所はコンビニなので、買おうと思えば何でも買える。

もう夕飯を食べるような時間なので何か奢ってやるんじゃないか
と思ったんだ。

『ステイブ・セガール』

斜め上どころか、はるか大空へと羽ばたいていくユーの言葉。

「無理っす」

俺が何か言おうと、したときに。

誰かがコンビニに来た。

「すみません、もののけ姫を信じますか？」

聞きなれた声。

そして、こんなバカな事を言うのは歩か織戸のどちらかだけだ。

俺は二足歩行から四足歩行にチェンジして二人から距離をとる。
話しかけられたユーはバカな男——歩から顔を俺のほうに逸らす。

この長い時間いたからかこいつがなんて言いたいのかだいたい分かる気がする。

こいつなに？　みたいな感じだろうな。

俺は肩をすくめて（四足歩行のまま）見せる。
呆れていると、歩は何を思ったのかユーから離れる。

何するんだろう。あのバカの事だ。どうせバカなことしかしないだろう。

歩はユーの方へと体当たりしかねんばかりのスピードで走って行き、まずは側転。

両足をつけたと思ったら抱え込み二回宙返り一ひねり。
うおっ！　あいつすげえ技をお見せしやがった。

と思つたら足首をぐきつと嫌な音を出して捻つてやがった。
「ご愁傷様。」

俺は肩を少し震わせているユーの顔を伺う。

……笑いを堪えているのかな？

歩は足首を抑えてぐるぐる廻っているのを確認して。

「なんで笑い堪えてるんだよ。笑いたいなら大声だして笑えばいいじゃねえか」

小さい声で俺が囁くと、ユーは目を瞑り首を左右に動かす。

『できない』

ただ、それだけ書かれた紙を俺に向け、歩の方に顔を向ける。
無表情だったけどなんだか悲しさがあつた……気がする。

表情が変わらないから断言はできないけどね。

二人が話を始めたようなので、特にやることがなくなった俺は、家に戻る事にした。

今なら家には誰もいないからこつそり帰っておけば大丈夫だろ。最近殺人事件も起きてる事だし。

家に向かつてる途中に体がむずむずしてきた。これは人間に戻る予兆だ！

すぐさま人目のつかないような場所に移動して、元に戻るのを待つ。大体5分かな。

よし、体が……もどったあああああー！
幽霊化は結構使い勝手がいいが、反動が戦闘不能と同じだからな。

どういう理論なのか知らないけど服もちゃんと来ている。
俺の考えでは犬になったときの毛皮が服だと思ってるんだけど神は何も教えてくれないので詳しい事は分からない。

戻った体でその辺を走っていると。
歩を発見した。

声でもかけるか。いや、待てよ。
今まで何してたんだ？ と聞かれるよな。

どう、答えるかな。
風に聞きなっ！ とか？ 足滑らせて頭打って気絶してたとか？
うーん。良い言い訳が出てこない。

そんなことであーうーと悩んでいたら、視界の隅で歩が人の家へと駆け出していた。

な、なにしてんだ!?

強盗? とかいろいろ頭をよぎったが、その家の二階をの窓を見て馬鹿げた考えはすべて消えた。

血だ。血がべつとりと塗りこむようについていた。

猫でもないのに全身の毛が逆立つ。

あいつ、まさか!

俺は考えたと同時に駆け出していた。

体全身冷や汗びっしょり。何も考える事ができない。

俺はドアを蹴破りようにして中に入り、歩の無事を確認することが……。

「歩!」

歩は何かで刺されたような痕があり、血をだらだらと流して倒れていた。

俺はそこで呆然としていたんだが、殺気を感じて、狭い廊下を横に転がった。

鋭利な刃物が俺の横を通過した音が聞こえる。

二撃目に警戒していた俺だがそれっきり攻撃は止んだ。

さっきのが犯人なのか?

暗くて髪がなびいたのしか見えなかったなあ。

それより今は歩だ。

完全に動かなくなっている歩。

放っておけば、いや、もう既に手遅れだろ。

血が出る場所は心臓付近。そんな場所を一突きされてしまえば
そんなので生きている奴なんてゾンビとかそういう存在だけだ。

どうすることもできないで俺はそこで悄然としていると。

誰かの足音がこの家に響く。

『まだ大丈夫』

俺が警戒していると、その足音の犯人はさきほど会った銀髪の少女――ユーだった。

俺はこの場にいるこいつは連続殺人事件の犯人じゃないのかと思
ったがたぶんないね。

さっき襲ってきたやつは銀色の髪の色をしてなかった。

仲間の可能性とかもあるけど疑いだしたら止まらないので本人に
確認をとる。

「ユー……おまえがこれをやったのか？」

声を抑えながら歩を指差して聞くと首を振った。

「犯人を見たか？」

再度首を横に振る。

さきほど会っているので大体分かる。

この子は嘘をつくような子じゃない。
だから、こいつを信じよう。

さっき見せてくれた紙の言葉は気になったがいつまでもここに
いるのはまずい。

殺人犯に仲間がいないとは限らないし、こんな所を警察に見つか
ればいろいろ面倒だ。

「ええと、こいつを連れてどっか人気の少ない場所に移動したいん
だけど、いいか？」

『かまわない』

俺は歩を抱えて、こんな時間には絶対に行きたくない俺の家の近
くにある墓場へと足を向けた。

やっぱりこんな時間に墓になんて来なければよかった。

人氣が少ないどころか周りには生物なんて何も存在しないんじや
ないかというほどにここは静かだ。

歩を適当に横にして俺は、さっき見せてくれた紙の言葉を思い出
す。

「今さらだけど……『大丈夫』って何がだ？」

『私の力で魂を砕かれないようにする』

どういう意味なのか俺は聞いたつもりだが、ユーの言った事はよく分からなかった。

魂を砕けないって、死なないって事か？

そんなこと本当にできるのか？

それこそあの馬鹿な神様みたいなおかしい存在じゃないとできないと思う。

心から信頼できるわけではないが、他に頼るやつもない。神様にだつてきつと人の命をそう簡単に生き返らせるのは無理なはずだ。

ここで、歩が死ぬのは嫌だ。だったら、可能性は少なくともこの子に頼るしかない。

「こいつを生き返らしてくれるのか？」

コクリ。ユーは無表情顔を縦に揺らした。

「俺には何かできる事はあるか？」

『離れて。私の声が届かない所まで』

声が？ 意味は分からなかったがユーの顔には真剣さがにじみ出ていたので言われたとおり大分遠くまで離れた。

ユーが点になって見えないほどにな。

ここからじゃまったく状況がつかめない。

俺は焦りに似た気持ちではらはらしたまま、その場であつちに行ったりこつちに行ったりとせわしなく歩く。

だいたい3往復をしたころだろうか。

ちらつと顔を向けるとむくりと起き上がっている歩とそれに正面から見据えたユーが対峙していた。

歩が動いてるぞ？

いったいどんな魔法を使えば今にも死にそうなやつを生き返らせることができるんだよ。

「歩！」

俺が大声で叫ぶと、よく事情が分かっているような顔をこちらに向ける。

大丈夫だ。俺もまったく今の状況が飲み込めてないから。

「^{すいと}慧人。俺、どうなったんだ？ 確かに心臓を刺されたんだが……」

歩は自分の手を開いては閉じを繰り返し、生きているのを確認する。

俺も分からないので、腕を伸ばして分からないと意思表示。

俺は今の状態を作り上げたご本人様を見ると、両手で可愛らしく紙を持っている。

『私が死なないようにした』

果たしてそれは簡単な事なのか？

俺が魔法をぶっぱなすのだって制御が難しいんだ。

人の命を制御するなんてそんなこと、俺をここに送った神様じゃ

ないかぎりそんな事はできないと思うんだけど。

目の前で復活してるんだし気にするのは止めよ。

「ってことは俺はゾンビにでもなったのかよ？ ネクロマンサーがお前は」

なるほど、死なないって事はこの先何が起きても死なないってことか。

ユーは強く頷いた。

「待てよ。俺が生きているって事はまた命狙われるんじゃないか？」
いや、生き返ったやつの事までいちいち把握できねえだろ。

『心配ない 私が一緒にいる』

空のように綺麗な青い瞳はまっすぐ歩を射抜いていた。

「まあ。俺もいるしな。うんうん。とりあえず……家帰えんねえ？」

俺の提案は体を震わせていた歩と謎の美少女ユーにあっさり承諾された。

4 話

六月も終わりに近づき、最近むさ苦しくなってきたこの季節に反して、この墓場には涼しい風が俺を過ぎていく。

まったく怖いよ怖い。お化けがでそうだな。

夏に怖い話をするのは恐怖で体温を下げ涼しくなりたいからだと聞いたことがある。

まさしくその通りだと思う。

今現在俺はさっきまであつかったのにかなり体温が落ちて過ごしやすい。

こんなに体温が落ちるなんて自分の嫌なことが起こったりした後くらいだけだ。

「ほらよ、さっき買ったおにぎりだ」

墓石に座るやつなんてなかなかお目にかかれないうらう。
今目の前でお目にかかってるけど。

おにぎりを投げた本人は墓石に腰を下ろして、おにぎりを頬張る。
俺の目の前にいるのは『歩』と書いて『ゾンビ』と読む男。

俺はそんな不謹慎なことはしない、いい人なので地べたに座って歩の方に顔を向ける。

「もうすぐ死んで一ヶ月記念だなあ」

俺がしみじみと言うと歩はなんとも複雑そうな顔をする。

「俺もお前の秘密を知った一ヶ月記念だ」

歩が死んだ時のことを簡単に言うといいつはゾンビになりました。ユーがどうやって人を生き返らせたのかは教えてくれなかったが、まあ、生きてるんだし細かい事は気にしない。

ユーにそのことを聞くと悲しそうな雰囲気纏ってしまふのだ。無表情だから本当はただの勘違いなのかもしれないけど、俺はその勘違いにわざと騙されてやり、聞くのをやめたんだ。

ああ、あとその日を境にメガロに襲われる回数が増えました。

互いににやつと笑っておにぎりを食べ終え、ペットボトルの飲み物を飲み終えたときに歩がなぜか振りかぶる。

「どうしたんだよ？ 準備体操？」

「いや。ペットボトルを投げてどこまで飛ばせるかちょっと試してみようかなと」

「いよーし。だったらどっちが遠くまで飛ばせるか勝負だ！」

俺はペットボトルを持って突きつける。

歩はふっと意味ありげな笑みを浮かべた後に「いいぜ」と言った。

「お前はとにかくそういうの好きだもんな」

「当ったり前だ。せーので行くぞ！」

俺達は腕を下にさげ、片足を大きくあげる。

「「せーの!」」

ぶん!

バットをおもつきし振ったときのような耳に心地いい空を切る音とともにペットボトルが打ち上げミサイルの如く飛んでいく。

二つのペットボトルはどんどん空へと飛んでいき、宇宙空間に入。

そして、キラんと光り、綺麗なお星様となりました。

「どこまで飛んでったんだ？」

歩は遠くを見るように手を横にして額につけている。
今気づいたんだけどこれって測定不能で俺の勝ちじゃないか？

「俺の勝ちだぜ!」

「はあ?」

歩は何言ってたんだコイツと言った様子で首を傾げている。

「いや、だって測定不能だったら俺の勝ちだろ?」

「そんな理不尽なルール聞いてないぞ」

あり? 言ってなかったけ?

っと、どうしようか悩んでいたら何かが俺たちの元へ落ちてくる。

どうやら宇宙空間には行ってなかったらしい。
光ったのも気のせいだったかあ。

一瞬嘆いたがすぐに妙案が頭にぽんと出てきた。

「落ちてきたのが、俺の麦茶だったら俺の勝ちな」

「お前のが落ちてきたら負けじゃないのか？」

……あ、そっか。

俺はわくわく気分で落ちてくる物をじーと見続けそれを見極める。

二つのものが落ちてくる。

「お、おい。あれはペットボトルじゃないぞ」

歩はなぜか焦ったような声をあげる。

「隕石だ！」

「なんでもいいけど離れるぞ……ってうおい!？」

俺は歩と逆方向、二つの落下物の方面へと走り出す。
もし隕石だったらこの目ではうちし、しっかり見ないと。

「バカ、危ないぞ！」

危ない？

はっ！ もし隕石だったら……俺死ぬじゃねーか！

俺が歩のほうを見ていると、唯一の明かりであった、月明かりが遮られる。

俺は慌てて頭上を見上げると、どうやら俺の推測は外れていたらしい。

クマと女の子。

空から降ってきたものはその二つだった。

ど、どうしよう。

どっちか助けないとかなりのスピードで落ちてるんだ、重力がこっうなんかあなってももの凄い威力で地面に激突しちまうぞ！

俺は動物を助けるか少女を助けるか一瞬迷う。

どっちも同じ命、どちらも助けられるならそれに越した事はないんだけど。

俺はどんどん迫ってきている一匹と一人の人のほうを助ける方を選んだ。

決めて地面に足をめり込ませるかのごとく勢いをつけて、跳ぶ。

あとちよつとだ。

俺は目一杯腕を伸ばして、ヘッドスライディング気味に人——あれは女の子か——をキャッチ！　するつもりがその女の子に……思いつきり潰されました。

俺は背中に女の子を乗せたまま空を跳ぶように両手両足を伸ばした状態で、俺は地面と顔を摩擦させながら地面に着地した。

身体中がいたい！　死ぬ！　俺はゾンビじゃないんだからもちろん痛みを感じるんだ。

……ゲームオーバー！

俺はその場で身体を痙攣させてそのまま動かなくなった。

「ん？ なにこのぼろ雑巾？」

「それが助けたやつに言う言葉かあああああーっ！」

俺は薄れていていた意識を再び稼動させて、女の子を吹っ飛ばすように起き上がる。

案の定俺の上に乗った女の子は驚いてしりもちをついていた。

「あんた何もんだ！」

俺はその言葉をそっくりそのまんまお返ししてやりたかったが俺は女の子を見て口を動かす事を忘れてしまった。

可愛いのだ。栗色に近い髪にとても人とは思えないほどに大きな瞳。

そして、つーと頭の上へと視線をやると、そこにはアニメでしか見たことのない『アホ毛』があっただのだ。

「あんたあたしの魔装錬器どこにやった！」

女の子が怒鳴るとそれに対応するかのようになアホ毛がピコピコ何かを受信するかのよう揺れる。

「待ってくれって！ ええと、魔装錬器？ それってどういう——」

ものなんだ？ と俺は聞こうとしたけど最後まで言い終える前に

固まってしまった。

俺が喋ってる間になんか女の子のコスプレ衣装が薄くなってるような気がするなあと思ってたんだけど。

薄くなってるというか消えとるやん！

「お、お前！ 服が！」

俺があわあわと告げると、女の子は「ほえ？」と間拔けな声を上げる。

女の子は、言葉の意味を理解するのに数秒時間をかけてから、ゆっくりと顔を自分の身体に向けて行く。

そして、ぼわつと頭から赤いペンキを被ったかのように全身を真っ赤にして、

「こつち見んなっ！ こんの変態っ！」

即座に手で大事な場所を隠して回し蹴りで俺の頭を蹴り飛ばす。ずざざつとまたもや地面を雑巾がけしてしまった。

そりゃ裸を見たのは悪いと思うよ。

でも不可抗力じゃん！ 理不尽じゃん！

俺がずざざつとなってる間、歩何やってるんだ。

「魔装錬器って……これか？」

俺のヘッドスライディングが止んだところに歩の声が聞こえた。やっと、魔装錬器とやらがなんなのか分かるぞ。

俺は土を払いながらそつちを見ると、うわ、裸の女の子が視界に入っちゃった。

目で見えないように遮りながら歩が持ち上げてるものを見ると、ピンク色の可愛いらしいチェーンソウがあった。

あれが魔装錬器なのか。そう言えばコスプレ少女と話したことが一回だけあったがその女の子も魔装なんちゃらとか言ってたな。

ふむふむと頷いていると、あれ？ 歩の後ろに何かでかいものが……。

って、あれクマだ！ 俺を三人ぐらい合わせた身長の大きさで学ランを着ているクマがいた。

「歩！ 後ろみろー！」

「へ？」

俺の声に気づいて振り向くと同時にクマが鋭い爪でぶすつと歩を刺した。

ああ、死んだね。普通の人なら。

噴水の如く水を吹きだして、やっちゃったよと顔に書かれたアホ面でこちらを見る。

「やばい、動けない。助けて」

とても、傷を負っている人とは思えないほどに明るい声で助けを求めてくる。

今の歩はちょっと手が離せないから風呂入れてきて、みたいな感

じだ。

「分かった、分かったよ。ええと、女の子は……っと」

辺りを見回して、女の子が避難したかどうかを確認すると、近くの墓石に隠れて、顔だけを出していた。

「あいつ、倒していんだよね？」

たぶんメガロだと思うんだけど、この子の友達だったら倒さないほうがいいだろ。

そう考えて俺は聞いたのだが、女の子はバカにするように笑って、

「あんたに倒せるわけじゃないじゃん。あんたなんか5秒もあれば殺されちゃうんだからな！」

よし、分かった。

俺はポケットに器用にしまっている神様がくれた拳銃を出して、それをマシンガンに変える。

神様がくれた拳銃はこのマシンガンをしまったためのようは入れ物みたいなもんなんだ。

これだけでも使えるのは変わらないけどな。

「おらぁああああ！」

マシンガンのトリガーを引いて、魔法弾を発射。
たくさん弾が歩&クマにどんどん突き刺さっていく。

「ちょ！俺に8割ぐらいあたってんだけど！」

「わりい。俺数うちや当たるを信条に撃ってるから。ぶっちゃけ、射撃能力あんまないんだ」

トリガーを引く、手を止めて、片手で持っていたのを両手で持ち、魔力を込める。

小型の拳銃ではできない、このマシンガンモードだけの技——レーザーを放出できる。

レーザーっても魔力で作ったようは魔力砲だ。

この街を一撃で破壊することだってできるほどに威力が高いのだがまあ、制御すればこいつと歩を倒す程度で止められるだろ。

歩を手につけたまま、俺に向かって走ってくるクマの頭に銃口を向ける。

距離はどんどん近づいてきて、俺の前までくる。

その間も少しずつチャージをして、あとちよつとだ。

タックルだったらずかつたけど、どうやら俺を殴って倒そうとしてるみたいだ。

歩がくっついていてる手を上にあげたのを確認して、俺はそれが振り下ろされる前に銃口をクマの腹にあわせて、

「喰らえ。パーフェクトスイトキャノン！」

マシンガンの銃口から、銃口のサイズを越えたレーザーがクマと歩を巻き込んで墓場の半分を破壊してしまった。

ひゃっほう！ これ撃つとテンションあがるなー！

っと、後でこれ直さないと。

「うそ、だろ」

俺が銃を頭の上に掲げて喜んでいるとそんな驚いた声が俺の耳に入った。

くるっと振り返りまだ裸の女の子のほうを見る。

「見んnaって言ってるだろっ！ エロ口軍曹っ！ 死んじゃえっ！」

話ができないじゃん、これじゃあ。

服を調達しなければならんだけど……どうっすかあ。

今の俺はワイシャツと下着だけの動きやすい服装だ。

学ランがないから、貸せる服っていうとワイシャツしかない。

まあ、別にいつか。

ワイシャツを脱いで女の子の方に投げる。

「臭うかもしんねえけどそれでも着といてくれ」

「見んなよ！」

見ないから。

俺は女の子に背を向けて、歩の状態を確認。

上半身と下半身が分かれてだいぶ惨い状態に……。

さらに別れたその身体は所々焼け焦げていて、本当に生きているのか自分でも疑ってしまう。

「うつわぁ。ええと、どちらさん？」

「相川歩だ！　ちよっとくつつけてくれ！」

上半身だけで下半身をつけるのは結構大変みたいだ。

俺は歩を持ち上げて、下半身にはめ込むようにしてくつつける。

最初逆にしてくつつけてみたけどつかなかった。

そんなことをしたら睨まれてしまったのでごまかしの言葉をと。

「服もぼろぼろになって……」

「全部お前のせいだぞ」

ようやくくつついて汗をふき取るようにしていると、下着だけになっちゃった、服の裾をひっぱられた。

歩がそちらを見て俺にくつと親指を立てたので、なんだ？　と疑問顔のまま振り返ると。

ああ、確かに眼福だ。

裸にワイシャツって……なんかエロイ。

「あたしの魔装錬器は？」

俺は歩を見ると、歩は手をつってから、

「さっき飛ばされたときにどっか行ったぞ」

「だってよ。ぶへっ！」

殴り飛ばされてしまった。

「早く見つけて来いよな！ あれがないと、あたし……魔法使えないだろっ！」

それは大変だろうな。

あの変な格好から、こいつが時々現れ、メガロ退治をしてくれるコスプレ少女の仲間だろうと予想した俺。

魔装なんちゃらがどうたらって言ってたし。

「分かったって、探すから」

俺は歩と一緒に搜索隊を結成した。

5話

まあ、案外すぐ近くにあったんですけどね魔装錬器とやらは。ただど魔装錬器というなのチエーンソウは女の子が触れた瞬間バチチッと火花を散らす。

「手品か？」

俺が尋ねるとぽかっと頭を殴られた。

「なんであたしは触れないんだ？」

「あれだ。うん結界でも張ってあるんだろ」

アニメで見たことあるもん。

こうばちつとなったりしてるのを。

「はあ？んなわけないじゃん。とりあえずあんたん家に連れてけ。電話しなきゃ」

「どこに？　というか携帯ならほら」

拳銃が入ってないほうのポケットから携帯を出す。

あれ？　なんか出しにくいぞ。

やっこの思いで携帯を取り出すと……壊れとる！
ヘッドスライディングしたりしてたからか。

「なにそのゴミは？」

ゴミじゃない！

いや、確かに今はこんな状態だけど輝いていた時期もあったんだ。

さらば我が友よ！

「歩、後任せた」

「え？ まじ？ いまいち状況が飲み込めないんだが……」

「ああ、俺もまっつたく理解できてないから。携帯とりあえず貸せばいいんじゃないか？」

「そうだな。ほら」

歩が携帯を取り出し、渡す。

それを見届けた俺はさっき自分で壊してしまったお墓の修理にとりかかる。

自分で壊してなんだがこれ、大丈夫だよな？

呪われたりしないよな。

墓を修復していく。

修復は思ったよりも時間がかかってしまった。

もともと独学みたいなもんだからいまいち直したりするやりかたは知らないんだよな。

「あんたたち、あたしの代わりに魔装少女になれ！」

「へ？」

突然大きな声をかけられたと思ったならわけの分からない事を言うてきやがった。

「だーかーらー、魔装少女になれって言ってるだろっ!？」

「ごめん、全然分からない」

俺はやっと修復が終わったので話に混ざる事に。

女の子——ハルナって言っらしい——に話を聞いても魔装少女になれの一点張りなので歩に事情を聞く。

ハルナは魔装少女らしい。

ハルナの目的はこの世界に現れるメガロを倒すことと、あ、アーチファクト？ あれアーティファクトだっけか？ それを探す事らしい。

だけど俺達のどちらか、または両方が天才美少女悪魔男爵ハルナちゃんの魔力をすべて奪ってしまったらしい。

だから、その責任を俺たちがとれだ。

だからって魔装少女って。少女って。少女って。

「あんた、名前は？」

「俺か、俺は阿佐替人だ。んでこっちが相川歩だ」

「知ってる。スイトだな」

俺が親切心で紹介してやったが無駄だったよう。
うっ、涙が出てくるぜ。

「とにかく早速魔装少女になる練習だ！」

「まてーい！俺はまだ認めてねえぞ！」

「うるさい。魔装少女になれるなんて光荣だろう！？」

「光荣じゃねえよ！なんで少女なんだよ！」

俺が文句を言っていると歩が肩に手をのせ、

「あきらめろ」

すべてを悟ったような声で言った。

これがゾンビになった人のみがたどり着けるという悟りなのか？

「いーやーだー！俺がなんでもなしたことしなきゃなんねえんだよ！
理不尽だ！」

「ああ、そうだ。おい、ハルナ」

歩は思い出したかのようにポンと手を打つ。
なんだろう。

気になったので耳を傾ける。

「一つ条件がある」

「何？ 変なことなら蹴るからな」

「俺の事はお兄ちゃんと呼んでくれ」

どげしっ！

少女とは思えない強い蹴りが歩を打ち抜く。

続いて、なぜか俺にもやって来た。

「なんで俺もなんだよ……」

俺もあきらめ半分で聞く。

まあ、どうせ理不尽な言い分なんだろうな。

「あんたたち馬鹿そうだから」

ほらね。

6話（前書き）

前の更新から3週間くらい経ってしまいました。

6話

学校での昼休み。

普段はコンビニ弁当なのだが、今回だけは違っんだ。

弁当があるんだよ。

ハルナが作ってくれた弁当箱を取り出し、歩の下へと行く。

「歩ー弁当食おうぜ！」

「テンション高いな。何かいいことでもあったのか？」

「いんや、別に」

歩の向かいの席を陣取り、イスを歩の方へ向け、弁当箱を机に置く。

一体どんな弁当なんだろう。

ハルナには悪いけど料理ができるようには見えない。
むしろ、料理はできなさそうなんだよなあ。

「おーい、相川、彗人ー！ 俺も混ぜてくれよう」

「おー席持って来いよ」

俺が返事をする歩はあとため息を吐いた。

どうしたんだよ。ため息なんて吐くもんじゃないよ、まったく。

「またうるさいのが……」

「またって言ったよな？　もしかして俺もうるさい子？」

「ああ、そうだ」

歩は箸がついていなかったのか教室の後ろにある個人ロッカーに割り箸をとりに行った。

俺は先に頂こうとおもい弁当箱を開ける。

固まっちまったよ。弁当箱から溢れんばかりの光を放つ卵焼きにな。

氷のように完全に固まった俺の表情を見て、織戸は俺の弁当箱を覗く。

そして、引きやがったよ。

「お、お前が馬鹿なのは知ってたがまさか、ここまでとはな……やるじゃねえか！」

「待て、こら。馬鹿って言ったけどな、このまえの小テストは俺のほうで成績良かったよーだ！」

「だつ、この前のはその、俺のテストが拉致られたんだよ！　見てただろ？」

「誰が馬鹿の答えをパクルんだよ。むしろパクった奴に同情するぜ」

「何馬鹿丸出しの言い合いしてんだよ」

俺たちの聖戦を馬鹿呼ばわりして歩は弁当箱を開く。

そして、俺同様に固まった。

俺と歩はハルナに対しての呆れを覚えながらもそれぞれの卵焼きをつつく。

「ふむうつ！」

歩が変な声を上げた。というか俺も出しそうになった。
この卵焼き、うますぎるぞ！

てつきり料理はできないんだと思ってたけどマジで料理できんのかよ。

ぱくぱく食べ進めているとふと気づいた。

ご飯がほしいな。

俺が頭を使ってご飯を手に入れようと思ってるけどマジで料理できない、織戸が歩のほうの弁当から卵を奪っていた。

「おい！ 相川の卵焼きがすごいぞ！ 今なら白飯と交換してくれるそうだ！」

織戸の宣伝を受けた歩の卵焼きはどんどん白飯にチェンジされていく。

いいなあ、炭水化物。

俺も交換してもらおうかなあと歩の弁当を見ている。
あれ？ 最終的に白飯しかないぞ。

「……」

歩の嬉しいような悲しいような矛盾したまなざしを受けて、

「半分ずつ分けようぜ」

俺は卵を弁当から半分だして歩のご飯と交換したんだ。

午後真面目に授業を聞いていたのだがまったく分からずノートをお絵かき帳に変えた時間も終わり、放課後。

「んじゃ！俺先帰るから！」

ユーが家にいるから、俺は最近早く帰るんだ。

ユーは何かと命を狙われてるらしく俺と歩で交代でユーを守るようにしている。

放課後の時間帯は歩が帰る事が不可能なので俺が先に帰るしかないのだ。

最近是比较的安全だし大丈夫っちゃ大丈夫なだけど。

念の為なんだよ。

俺は二人と別れた後、家まで真っ直ぐに戻った。

「たっただいまー！」

元氣一杯で俺は家の中に入る。

居間に行くとユーは今日も無事だ。

まあ、もしも無事じゃなかったら俺泣いちゃうからな。
テーブルをとんとんしていたので見てみると、紙が置いてあった。

『おかえり』

短いこの四文字だけど俺はなんだか嬉しくてユーの頭をこしこし撫でた。

されるがままにユーはじっとテレビを見ていたが、ちらとこちらに顔を向ける。

『やめろ』

はい、すいません。

ご機嫌取りのために俺はユーにお茶をいれ、差し出す。

ユーは何も言わず受け取る。
ずずずと啜るが特に何も反応がない。

うまいの？　まずいの？

何の反応もなく、そして最後まで飲み干し――。

『おかわり』

やったっ！

やっと反応があり、俺はうきつきとした足とりでもう一度お茶を入れに行ったのだ。

たまにはこういう平和なのもいいよな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8386q/>

これはゾンビですか？ 俺はゾンビじゃないけどね！

2011年6月29日02時04分発行